

文語日誌(平成二十五年十一月)

目黒文語教室へ赴かむと午後一時田園調布發漚谷行ききのバスに乗り込む。シルバー席二人分を傍若無人に占むるふてぶてしき風體の男あれば、余やや離れて座席を取る。發車まで時間ありて運轉手暫し席を離る。矢庭に男顔を覆ひて嘔吐す。余の前の席に坐れる老婆、汚物を氣にすること些かもなく大事なきかと親切に聲を掛く。客の一人席を立ちて運轉手を呼びに走る。その間も老婆、男の取散らしたる定期券を拾ふ等の世話を焼く。程なく運轉手戻り、男に聲を掛けたる後携帯電話を取り出して營業所に連絡を取る。直ちに代りのバスを差し回す旨の返答あり。二十分は待たさるるものと覺悟せるも數分を出ずして代車來たる。

その後は何事もなかりしが如く常と變らぬバス風景なり。バス會社の一件處理の手際よさもさることながら、この間終始生理的嫌惡感に竦み居たる余は老婆の純粹なる同情心に溢るる立居振舞に大いに反省せしめられつ。名もなき一介の高齡者なるらむも、テレビなどにて高みより法を説く佛敎者より遙かに佛心に近しとぞ覺ゆる。